

— 第29・30号 —
30周年記念号



実践女子大学

生活文化フォーラム

生活文化学科 30 周年によせて

主任挨拶

I 歴任教職員からの寄稿

①旧教員 ②旧助手 ③現職教員 ④現職非常勤 ⑤現職助手

II 学科 30 年のあゆみ

III 沿革

生活文化学科学生デザイン
30周年ロゴマーク



— 第29・30号 —
30周年記念号



実践女子大学

生活文化フォーラム

もくじ

主任挨拶

本学生活文化学科 主任 井口 眞美

2

(Ⅰ) 歴任教職員からの寄稿

【旧教員】

.....

4

【旧助手】

.....

6

【現職教員】

.....

7

【現職非常勤】

.....

14

【現職助手】

.....

17

(Ⅱ) 学科三十年のあゆみ

.....

18

(Ⅲ) 沿革

.....

22

主 任 挨 拶

生活文化学科のこれまで・いま・これから

― 選べる 見える 未来の姿 ―

本学生活文化学科 主任 井口 眞美

生活文化学科は、今年で三〇周年を迎えました。着任十四年目の私が、学科主任の立場で本学科の歴史を語るのは心もとないのですが、記録と記憶を辿りながら少しお話しさせていただきます。

【生活文化学科の開設】

学園創立一〇〇周年記念事業の一つとして行われた、一九九五年の本学家政学部的生活科学部への改称と生活文化学科の開設は、四年間もの長い検討期間を経て実現したと聞いています。そして、「ヒト」と「モノ」とのかかわりの中で、「ヒト」の生活に重点を置き、「ヒト」と生活環境との多様なかかわりを総合的・体系的にアプローチする研究領域を扱う生活文化学科が誕生しました。三〇年を経た現在でも、刻々と変化する社会や、家族構造の多様化、生活課題の複雑化等に向き合い、「生活のありよう」を多面的、総合的に捉え、探究する姿勢を持ち続けています。

【保育士コース新設】

生活文化学科開設から一〇年後、二〇〇五年には生活文化学コースと保育士コースの二コース制となり、中学校・高等学校教諭免許状に加え、保育士資格の取得が可能となりました。

【二専攻の設置】

続く二〇〇七年には、生活文化専攻と幼児保育専攻の二専攻を設置し、幼児保育専攻では、保育士資格だけでなく、幼稚園教諭一種免許状の取得も可能となりました。

最近では、在学生の実習先の幼稚園や保育所で保育者として働いている卒業生に出会うことが増えました。中には、早々に園長先生となり、保育所のリーダーとして活躍している卒業生もあり、頼もしい限りです。

【幼小コースの設置】

二〇一一年には、幼児保育専攻が幼稚園・保育士コース（幼小コース）と小学校・幼稚園教諭コース（幼小コース）の二コース制となり、小学校教諭一種免許状の取得ができるようになりました。これによって、生活文化専攻では、認定心理士資格や中学校・高等学校教諭一種免許状が、幼児保育専攻では、保育士資格、幼稚園・小学校教諭一種免許状が取得できる等、卒業後も「ヒト」とかかわり、活躍し続けるために有効な資格・免許が充実したカリキュラムとなりました。

思い起こせば、私の着任した二〇一二年頃は、幼小コースの運営を軌道に乗せるための業務や、生活文化専攻から生活心理専攻への名称変更に係る協議等、先生方はとてもお忙しいようでした。遅くまで会議を重ねる先輩方を横目に見ながら、新人の私はぼつんと一人家路につくといった日が幾度もありました。しかし、その苦勞の甲斐があり、現在では、幼小コース生が多が、小学校教員として頑張っています。

主 任 挨 拶

【生活心理専攻への改称】

二〇一四年には、現代生活学科の開設に伴い、生活文化専攻を生活心理専攻へと改称し、心や体の健康、家族、経済等、生活における課題を心理学的手法で実証的に考察することの特徴とする専攻が立ち上がりました。また、公認心理師受験資格も目指せるカリキュラムに変更したことで、一〇年を経た現在、他大の大学院を受験し、心理学の学びを更に深めていく学生も増えつつあります。

【生活文化学科のいま】

・選べる 見える 未来の姿

現在、生活心理専攻では、「公認心理師コースプログラム」「家庭科教員コースプログラム」「キャリア心理コースプログラム」という三つの緩やかなコースプログラムが用意されています。一方、幼児保育専攻は、「幼保コース」「幼小コース」の二コース制となっており、いずれの専攻でも、入学後に将来の進路を見据えてコースを選択できるようになっています。生活文化学科のキャッチフレーズ『選べる 見える 未来の姿』のとおり、学生たちは、大学での学びを通して、自分探しをしつつ、未来の地図を描いていきます。

・日野市との連携

日野市との連携により、学外にも学びのフィールドがぐんと広がりました。保育所・幼稚園・児童館・小学校等での実習はもちろん、日野市子ども包括支援センター「みらいく」内の中高生世代の学習支援や子育てひろばでの保育ボランティア、

発達支援センター「エール」でのボランティア等、両専攻の学生たちは、様々な場所で地域の子育て支援の一員として活躍しています。中には、現場での学びを卒業論文としてまとめる学生もあり、理論と実践を有機的に往還させながらより深い学びを獲得しています。

【生活文化学科のこれから】

現代社会において生きづらさを抱える人も少なくありません。少子化、育児不安や教育問題も深刻な状況に直面しています。それだけに、生活文化学科の学生たちには、「生活者の視点」に立って、多様化、複雑化する生活課題を科学的かつ実践的に学ぶ必然性が存在しています。実際、卒業論文のテーマは多岐にわたっており、教員は学生一人ひとりの課題意識に即し、学生の個性を尊重した丁寧な卒論指導を行っています。これこそ本学科の少人数制ならではの恵まれた学修環境といえるでしょう。今後も、学生それぞれの興味や進路に応じて専門知識を深めつつ、数多くのフィールドワークや実習、地域連携活動を通じて実践力を養い、社会で自立して活躍できる人材を育成したいと考えています。

日野という落ち着いた環境で、穏やかで誠実な学生と共に、教職員一同、末長く生活文化学科を守り育み、より豊かな生活文化の創造と次世代育成への貢献に尽力したいと思っています。

末筆となりましたが、これまで生活文化学科を支えてくださった教職員、関係者の皆様に感謝の意を込めて結びとさせていただきます。

歴代教職員からの寄稿

① 旧教員

越山 沙千子

(在職期間 二〇一八年～二〇三三年)

開設三十周年、まことにめでとうございます。在籍五年間のうち三年間はコロナ禍で、急遽始まったオンライン授業では試行錯誤の連続でした。緊張感のある日々でしたが、学生の皆さんや先生方、助手の皆さんとたくさん話し、笑ったことは大切な思い出です。「図画工作」と「音楽」で取り組んだ影絵の活動では、学生の感性と工夫に心を動かされ、特に印象に残っています。生文で存分に楽しみ、学べたことに心より感謝申し上げます。最後に、生活文化学科のますますのご発展と、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

塩川 宏郷

(在職期間 二〇一八年～二〇三三年)

私は転職が非常に多く、大学卒業後から僻地診療所、大学附属病院、在外公館、少年鑑別所、大学勤務を転々として参りました。同じところに五年以上在籍したのは本学だけです。それだけ居心地に不満はありませんでした。ただ、大学はとにかく会議が多くそれに伴う雑用も多くて閉口いたしました。いつ果てるとも見通せない延々と続くよくわからない会議が大学教員時代の思い出です。

長崎 勤

(在職期間 二〇一四年～二〇三四年)

ゼミの学生諸君と、二〇一七年～二〇二二年に学園祭で、アサヒ飲料さんのご協力のもと、自閉症児やダウン症児の子供が店員になり、学園祭の参加者のお客さんに、「白のカルピスとぶどうのカルピスのどっちがいいですか？」と注文を尋ね、カルピスをサービスする、といった「なかよしカフェ」を開きました。「なかよしカフェ」の日は、毎年晴天で、大学に行く早朝の朝焼けが綺麗だったことを思い出します。障害児と健常者が共に暮らすインクルーシブ社会のユートピアが一瞬出現したような空間でした。生活文化学科のご発展を祈念しています。

南雲 成二

(在職期間 二〇一三年～二〇三三年)

私が着任したのは、平成二十五年四月でした。生活文化学科に初めて初等教育教員養成の課程が創られた年です。横浜市公立小学校長を満期定年する直前の公募でした。教師教育実践研究(職能成長支援・指導)の発展を求め、志願を決めました。幼小コース第一期生(第一期生を中心に、生活文化学科専攻の学生さんと教育愛溢れる先生方と過ごせた三間(時・空・人)は、大切な大切な宝物です。

《人の生涯にわたる発達へのまなざしを持って生活を探求し、生活を紡ぎ、織り成す。》実践あるのみ!ですね。

長谷川 恭子

(在職期間 二〇三年～二〇八年)

助教として奉職しました五年間は、学生さんともよく話しましたが、先生方とも毎日よくお話しさせていただき、教員の在るべき姿を学ばせていただいたと思います。印象に残っているのは、東日本大震災岩手県宮古市支援プロジェクトと日野市こどもまつりへの参加です。どちらも学生さんの頑張りが素晴らしかったですが、特にこどもまつりの最後に一年生が参加する『そらに響け！ヒノソング』を踊り切った姿を見て、毎年親の気持ちで心が熱くなりました。とても貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。生活文化学科に、感謝しております。

細江 容子

(在職期間 二〇四年～二〇三年)

“A happy life consists not in the absence, but in the mastery of hardships. (幸せな人生とは困難のない人生を言うのではない、困難を克服した人生を言うのだ Helen Adams Keller)” 人が生きるといふことは、様々な困難に遭遇するプロセスであるとも言えます。この言葉が示す様にその困難を克服した人生こそが幸せな人生とも言えると思います。変化の激しい時代、品格高雅なるその人格と自立自営しうる女性育成のための大学教育を基に困難を克服し生きていってほしいと思います。本学の学生は心温かく極めて優秀であり実践での九年間は本当に幸せな時間だったと感じています。

松田 純子

(在職期間 二〇四年～二〇三年)

生活文化学科に着任して十九年間、主に幼児保育専攻で保育者養成に携わりました。学科開設十年の節目に設置された保育士コース（のち幼児保育専攻）から巣立った卒業生の活躍に誇りを感じています。「生活文化」の豊かさにふれ、改めて保育の営みの意味を探究できたことは、研究者としても幸せでした。在職中、先輩に教わった諺があります——転石苔を生ぜず (A rolling stone gathers no moss)。良い意味で、常に変化し続ける生文でいてください。三十周年、心よりお祝い申し上げます。

② 旧 助 手

小川 華歩

(在職期間 二〇二二年～二〇二三年)

生活文化学科三十周年、心よりお祝い申し上げます。社会に出て数年、生活心理も幼児・保育も社会生活に欠かせぬ学びと実感しております。今後多くの学生が学びを深められますよう、先生方のご健勝と学科の発展をお祈りいたします。

坂本 志穂

(在職期間 二〇〇七年～二〇一〇年・二〇二四年～九月)

開設三十周年おめでとうございます。私の在籍は時を経て二度ありますが、先生方とも職員の方々とも違う立場で学生の皆さんに関わるという、とても貴重な機会をいただきました。学科もコース・専攻と様々な変化を重ねていますが、これから時代在即した形で学生の皆さんに寄り添っていかれることと存じます。いつも温かく迎えてくださる皆様に感謝いたします。

鈴木 咲絵

(在職期間 二〇一〇年～二〇二三年)

教育関係の仕事が続けたく、現在は図書館の業務委託などもしている書店関係の会社で働いています。助手での経験が今の仕事にも生かされています。女子大学の共学化が進んでいる今日、女子学生の教育、活躍の場を広げられるそんな学科として今後の発展を祈念しております。

玉木 悦子

(在職期間 二〇〇四年～二〇〇七年)

生活文化学科開設三十周年誠におめでとうございます。生文の副手は学生対応が多く、たくさんのお客様と接しました。学生のみなさんが明るく接してくれたため、業務は多忙でしたが楽しい日々を過ごさせていただきました。これからも生活文化学科の益々の発展をお祈り申し上げます。

増田 帆南

(在職期間 二〇一九年～二〇二四年)

この度は三十周年おめでとうございます。在籍在職と合わせて九年間、生活文化学科にお世話になりました。学生の時には保育に関する知識を学び、仕事では学生支援といった経験ができ、多面で携わることができ誇りに思っております。この先の益々のご発展をお祈り申し上げます。

山口 紗織

(在職期間 二〇一〇年～二〇二三年)

助手としての三年間は先生方や多くの学生さんと関わり、サポートする立場でしたが学ぶことの連続でした。現在子育てをしている上で大切な経験もでき、貴重な時間だったと実感します。生活文化学科での様々な学びが教育現場など多岐にわたりますますご活躍されることを祈念しております。

3 現職教員

未来を育む四年間の軌跡―幼小コースの学生のあゆみ―

国語教育研究室 井上 陽童

小学校教諭一種免許が取得できる幼小コースは、二〇二五年三月で九十八名の卒業生を輩出し、そのうち七十名が全国の小学校で活躍しています。昨年度、新たに六名の教員が教育現場へと羽ばたきました。晴れて大学を卒業し、教壇に立つまでの学生の四年間の成長には目を見張るものがあります。

入学当初、百分間の講義に苦戦していた一年生は、徐々に慣れ、講義の最後まで集中して取り組めるようになります。二年生で初めて取り組む模擬授業では、普段仲良くしている仲間が子ども役であるにもかかわらず、緊張で声が小さくなり、板書をする手が震える学生がいます。しかし、回を重ねるごとに堂々と指示を与えられるようになり、授業への理解を深めていきます。三年生になると講義数がさらに増え、課題や指導案作成も多忙を極めます。それでも、一つ一つの課題を着実にやり遂げていく姿は大変頼もしい限りです。

そして、四年生の春を迎える教育実習。学生たちはこれまで学んできたことを活かし、配当学級の子どもたちと精一杯向き合います。四週間の実習を終えて大学に戻ってきた彼女たちは、見違えるほど立派に成長しています。今年度からは、三年生後期に小学校実習が実施されます。日本の未来を支える教師の卵たちを、これからも心を込めて育成していきます。

他者の境遇を想像し、連帯する保育士へ

社会福祉学研究室 大澤 朋子

着任して九年目を迎えました。実践女子大学の長い歴史のほんの一部と一緒に担えたことを光栄に感じています。これまで保育士養成課程の教員として、主に施設実習を担当してきましたが、実習を終えた学生たちが社会的養護や障害児支援にも関心を持ち、毎年何人かは職業として支援者になることを選んで卒業していくのを大変頼もしく見送っています。

保育士の重要な職域である児童養護施設等には、想像も及ばないほど大変な境遇を生きてきた子どもたちが暮らしています。彼らの判りにくく、尽きることのない「助けて」の声に応えるには、「子どもが好き」だけではない深い知識と技術が求められます。子どもたちの背景を知れば、その親も、そのまた祖父母も、同じように困難な境遇を生きていることが珍しくありません。授業では最も困難な状況に置かれた女性たちにも焦点をあてます。望まない妊娠、暴力、精神疾患、孤立の末に行き詰まる子育て。社会ではともすれば自己責任と切り捨てられるこうした女性たちの境遇を想像し、連帯することを学んではいけないからです。最も弱い立場の人に寄り添える社会こそ、すべての人が生きやすい社会であり、子どもたちがのびやかに育つ社会でもあります。卒業生たちには他者に寄り添える保育士として活躍することを期待しています。

生活文化の担い手を育てる

―音楽の創作活動からみえた学生の成長―

音楽教育研究室

小坂 光

この三十年間で社会の変化の速度は著しく上がり、音楽に対する価値観も大きく変化してきました。人工知能で作られた楽曲が人気を集め、パソコン一つであらゆる音が再生可能になった現代社会。驚くほど便利になった反面、作曲家・演奏者の思いや意図、生の演奏を通してしか得られない感覚に対する「感性」が次第に鈍くなってきていることに対して、音楽に携わる者としては強い危機感を覚えます。

今年度前期、幼小コースの二年生は図工・音楽・国語のクラブ授業として影絵の創作活動に取り組み、場面に合わせた十六小節の作曲に挑戦しました。作品に対する自分のイメージを音楽で表現し、小学生の前で発表した学生からは、「自分の好むリズムや旋律に気づき、その曲を誰かに聴かせられる嬉しさを覚えた。一から曲作りをすることの難しさを初めて理解した。しかし、それと同時に音楽には表現の仕方が無限といえるほどたくさんあることに気づいた」との感想が寄せられました。こうした貴重な体験から、「感性が高まった自分に気づいた」学生の姿がうかがえます。

利便性が高まった現代社会においても、人間だからこそ生み出せる生活文化を大切にし、さらに発展させることができる学生の育成のため、今後も微力ながら尽力してまいります。

「生活の危機」に抗う

家族社会学研究室

笠原 良太

物価高による家計の厳しさ、ライフスタイルの多様化・個別化による生活リズムの乱れ等々、「生活の危機」が叫ばれています。そのようななか、全国の大学から「家政」「生活」を冠した学部・学科が減っています。受験生からの人気がないからだそうです。社会の基本は人びとの生活であり、生活科学こそ、他者を理解する力、想像力、ひいては「生活の危機」に抗う力を養います。大学から生活科学がなくなること自体、「危機」にほかなりません。

生活文化学科は「生活の危機」に抗う最前線です。本学科の教員は、学内外のさまざまな機会を学生に提供し、学生もそれに応えて積極的に生活を学び、知恵にしています。少数教員だからこそ、学生の成長がよくわかります。他者の生活をテーマにしたディスカッションでは、自分と異なる境遇の人びとの生活に思いを馳せ、新たな視点を獲得しています。

昨年から家族社会学研究室では、岩手合宿（岩手大学・釜石市との連携）、生活版画ワークショップ（町田市立国際版画美術館との連携）、中高生・子育て世帯支援（日野市との連携）などを実施しています。いずれも、学生の想像力を膨らませる好機になっています。今後も継続して、「生活の危機」に抗う学生を輩出していきます。

生活に根差した心理学を学ぶ

認知心理学研究室

作田 由衣子

私が生活文化学科の教員として着任したのが二〇一五年でしたので、今年でちょうど十年目になります。あつという間でしたが、とても充実した十年でした。最初はとにかく必死で授業や学生指導などを行っていましたが、現在は最初の頃よりはスムーズにやれているような気がします。

私が特に力を入れているのは、ゼミの学生への研究指導です。学生は一、二年生の授業で心理学の基礎や研究方法などを学んだ後、三年生からゼミに配属されます。そこで日頃の生活の中での疑問や、自分自身の関心に基づいて、文献を読んだり教員やゼミの仲間と対話したりしながら研究テーマを決めていきます。これまでに五十五名が巣立っていきました。卒論はみんな苦労したと思いますが、どれもいいテーマで、卒論だけで終わらせるのがもったいないものがとてもたくさんありました。最近は、積極的に学会発表するように指導しており、これまで四名が発表しています。科学リテラシーや批判的思考を含め、研究マインドをしつかり身につけておくことは、研究者にない人にとっても大事なことだと思っています。生活は大学を出てからも続いていきます。生活文化学科で、生活に根差した心理学を学ぶことは、これからの社会を生きる上で強い武器になるのではないと思っています。

心と身体の声に耳を傾けて

運動生理学研究室

島崎 あかね

生活文化学科に着任して、早いもので十年目に入りました。学科の三十周年を迎える喜びとともに責任を感じています。着任時から共通教育科目を担当しているため、他学科の学生とも関わる機会が多いのですが、この十年で学生の心身の健康や運動への関心度が大きく変化したと感じています。現在の在学生は多感な中学・高校時代がコロナ禍だったという要因もありますが、健康や運動に関心はあるものの、他者と一緒に取り組んだり共有したりすることに抵抗があるという学生が増えました。私自身、運動やスポーツを通じて仲間とともに高め合うことや競争すること、一緒に汗を流すことから得られる達成感や充実感などを体験的に理解しているので、今の学生の様子を見ると「もったいない」と思ってしまうこともしばしばです。身体を動かして汗をかき、自分の心の中に生まれるさまざまな感情をちゃんと表現できるようになってほしい、そんな思いで授業を実施しています。

生活を維持していくためには他者との関わりは必須です。自分の心と身体の声に耳を傾け、その声をいろいろな方法で表現するとともに、最後まで諦めない気持ちや踏ん張る力を体得できるような授業を心掛け、学生だけでなく私自身もより一層成長していけるように努力したいと思っています。

「一皮むける経験」を応援します

生活経済学研究室 高橋 桂子

大学では、「生活経営学」「生活経済学」などの専門科目に加え、「金融リテラシー入門」など共通科目を担当しております。大学教員としての勤務先は現在が二つ目、教育・研究に携わるようになって約三十年が経ちました。本学の学生たちは統計分析コンテストや学会発表にも積極的に挑戦してくれる、たいへん頼もしい存在です。

私事ながら、現在、姪がアメリカの大学に通っており、帰省のたびにキャンパスライフについて楽しみに話してくれます。寮には二段ベッドと机がなく、食堂の食事も美味とは言えず、課される宿題やレポートは膨大だそうです。それでも将来の職業や目標が明確だからでしょう、学ぶことを「当然」と捉え、「先輩たちも、このタフな四年間を乗り越えたからこそ社会で活躍できている」と理解しているようです。遅しく成長していく姿に触れるたび、大学教員として、すべての学生さんに刺激や希望に満ちた学びの場と環境を提供し、自ら考え、自ら判断する力を育む機会やトレーニングを通して、全力で応援し続けようと思わずにはいられません。

数ある大学の中から本学科を選んでくれた皆さんが、この場で学ぶことに誇りを持ち、経験を通して「一皮むける経験」をされるよう、微力ながら全力を尽くしてまいります。

一人一人の顔が見えるかわり

教育学研究室 田中 正浩

生活文化学科開設三十周年という節目に立ち会えることを喜ばしく思います。着任して十二年、非常勤の時期を含めればもう少し長くなりますが、学生たちとじっくりかわり、向き合ってきた時間はこの上なく充実していました。これは、学科開設時より続く少人数ならではの教育方針である一人一人の顔が見える、教員と学生との距離の近さに拠るものと思っています。

学生たちが本学へ入学して良かったこととして必ず挙げてくれるのが教員と学生との近さです。学生同士の近さもそうです。穏やかで誠実な学生たちですが、一方で、少し内気で控えめな、周りの目を気にしがちな面もあります。そんな学生たちが、授業で、ゼミでの議論や合宿で、他者との対話を通して学んでいく姿、自身の意見を表明していく姿を徐々にですが見せてくれるようになります。これらは単なる変化ではなく成長です。傍にいて、嬉しく思える瞬間です。

このような教育環境など学科として継承すべきこと、そして、発展的に創造すべきことを問いつつ、学生たちが選んだ大学、学部、学科での学びや出会いが彼女たちを成長させ、描いた夢が叶えられることを願い、支援、応援できればと改めて思う次第です。

「古きを温ねて」学科の将来を知る

生涯発達心理学研究室

塚原 拓馬

生活科学は人の生活を支えるための学問であり、これまで多くの学生達に対して人の暮らしに欠かせない知識や技能を伝えてきました。時代が変われども、私達の暮らしにおいては、衣食住、教育・心理・経済・社会、情報に関する知識は必要不可欠なものです。このような生活科学部において、本学科は多くの卒業生の皆様や関係者の皆様に支えられ、三十年という長い時間を重ねることができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。そして、これから生活文化学科は大きな転換期を迎えようとしています。

そのような時、「温故知新」という言葉が浮かんできます。それは懐古主義ではなく、新しきを知るために、古きを温ねていくことから始めてみる必要があるのかもしれない。これまでの歴史や経緯を改めて知り、そこに残された課題は何か、それらを理解した上でこれから変えることができるのか。は何か。

生活科学部と生活文化学科の節目の時期だからこそ、本誌（生活文化フォーラム）を振り返りつつ、今回開催する「生活文化学科三十周年記念」イベントを通して、本学科の将来を知る機会にできれば幸いと存じます。

こどもがまんなかにいる社会

保育学研究室

野尻 美枝

開設三十周年を迎えた本学科は、人々の暮らしの中にある、小さくも尊い「こども」へのまなざしを大切にしながら、保育のありようを学生たちと共に考えてきました。こどもをまんなかに据えて育ちを支える営みは、時代が移り変わっても、人とひとが出会い、心を通わせるところから生まれるものだと感じています。

二〇二三年に設立されたこども家庭庁が掲げる「こどもがまんなかにいる社会」という言葉は、私たちが長年大切にしてきた想いと重なります。こどもの姿に学び、こどもの声に耳を傾けること、その積み重ねが、こどもへのまなざしを育み、やがて地域や社会へと広がっていくと信じています。

卒業生の皆さん、そして在学生の皆さんにも、そうしたまなざしをどうか心に留めていてほしいと願っています。一人では大きなことはできなくても、自ら動くこうとする想いを大切に、自分を信じて、共に歩む家族や仲間と手をたずさえながら、こどもの生活や文化をていねいに見つめ、豊かな保育実践や安心して過ごせる子育てへとつながっていきますように。

もし、その歩む道の途中で、嬉しいことや悩み等を誰かと分かち合いたい時には、いつでも学び舎を思い出し、どうぞお立ち寄りください。教職員一同、心よりお待ちしております。

三十周年を迎える生活文化学科と教員生活

社会心理学研究室

水野 いずみ

気づけば二十一年めの生活文化学科での生活です。非常勤の時期も含めると、二十三年めです。親密な人間関係に関心を持っており、「家族社会心理学」という九十分の通年授業にお声かけを頂きました。教員免許状取得のための教育実習の経験はありましたが、大学での授業では、教室が広くて、どこを見て授業を行えばよいのか分からない日々が続きました。また、学生さんたちに伝えたいことが多すぎて、さらに、当時は、黒板などに内容を書きノートをとる形式での授業だったので、いつも時間が足りませんでした。ですが、百分授業でレジュメをデジタルで配布する現在でも、多すぎる内容を減らすことに苦戦しているのは変わっていません。

この二十数年間で様々な技術の発展は目覚ましいですが、教員を行って必要となることには、変わりがないことも多いです。女性をとりまく社会環境は、当時の様子を考えれば相当充実がみられますが、おおむね女子大学生に適した教え方というものはあるようです。学園に始めて、その教え方を授業で行えるようになり、実感と有難みをもちました。私自身のこれからの学園生活は、これまでのように、結局はあまり変わらなような気がします。三十周年記念を機に、卒業生のみなさんにもしお目にかかれたら、うれしいです。

歴史を紡ぎ、未来を育む

教育心理学研究室

八木 孝憲

歴史や伝統を紡ぐという営み——それは、各時代を生き、さまざまな事柄に関わってきた人々の思いが結集した、一つの成果であると言えるでしょう。三十年という年月が持つ伝統の重みは、これからの時代を生きる私たちに、明確な問題意識と大きな責務を問いかけてるように感じられます。

これからの生活のありようは、これまで以上に多様で変化に富んだものになることが予想されます。しかし、学びの質や学習環境において、何を中核に据えるべきかという問いに対する答えは、これまでとそれほど大きくは変わらないのかもしれないかもしれません。

ここで、ハリール・ジブラーンの詩『子どもについて』の一節をご紹介します。

「あなたがたは彼らに愛情を与えることはできません、あなたがた自身の考えを与えることはできません。なぜなら、彼らは自分自身の考えを持っているのだから。」……（中略）……

「あなたがたは弓のようなもの。その弓から、子どもたちは生きた矢として放たれていくのです。」

これまで積み重ねられてきた歩みに敬意を抱きながら、私たち一人ひとりが、これからの時代を支える次世代の育成に責任と希望を携え、ともに歩んでいきたいと思っています。

そしてバトンは渡される

初等教育(算数)研究室

渡辺 敏

幼児保育専攻の教員になって十年余りがたちました。その間、学生の皆さんと時間を共にして、いつも感じていたことがあります。それは学生の皆さんが愛情をたっぷり受けて育ってきたということです。ある学生は「うちの両親は過保護過ぎる。」と言っていました。またある学生は「お父さんみたいな人と結婚したい。」と言っていました。自分の両親を明るく語る姿を見ていると、子どもの時に受けた愛情は目に見えない宝物として、ずっと彼女たちをあたため続けているのだと思いました。保護者の方はもちろんですが、幼児期や児童期に関わった先生や大人の方からも学生の皆さんは愛情を受け取ってきたのではないかと思います。そういった意味ではうちの教員も負けず劣らず皆さんを大事に育てているように感じます。生活文化学科は教育の場ですが、大家族でもあり、毎年かわい子どもたち(学生)を育て社会に送り出しているのです。卒業した学生の皆さんは受け取った愛を、だれに注いでいるのでしょうか。現場で関わる子どもたちや自分の家族、また職場の同僚やお客さんに皆さんの愛が伝わっていればいいなと思います。時代の変化は速いですが、心の中で育まれた愛を、大切な人にしっかりと渡してください。

4 現職非常勤

泉 碧衣

保育活動の実際^a

開設三十周年、心よりお祝い申し上げます。私の担当する授業では、ピアノを懸命に弾き歌いするとともに、緊張する演奏者を支えようと、身体を揺らし笑顔で聴く学生の姿があります。その共感力や思いやりを、今後生かしていけるよう支え、学科のさらなる発展にも寄与してまいりたいと存じます。

伊藤 健彦

心理学演習・心理学実験

私は本学で、演習形式の授業を担当しています。学生との議論を交えながら、授業内容を柔軟に変更させることに醍醐味を感じています。人の心と行動に関する学生の興味はとても大きなもので、彼女たちと交流することは私の教育や研究のモチベーションになっています。

稲森 絵美子

家族臨床心理学・臨床発達心理学

学生と共に十三年間、家族がもつ意味について臨床心理学的視点から考えてきました。世の中も、授業の形式も変化しましたが、新鮮な視点で自分を振り返り、これからの歩みを考える学生と共に学ぶ楽しさは変わりません。これからの日本の社会の中で、学生達が活躍していくことを祈念しています。

小林 貴史

初等教科教育法（図画工作）

生活文化学科の学生と授業を通してかわる中で強く感じたことは、皆さん手を動かすことがとても好きなんだということでした。そして、手を動かすことから感じ、考えて、自らの学びを深めている姿からは、教科教育としてのより実践的な力を獲得していく可能性を見ることができると感じます。

笹川 啓一

初等教科教育法（社会）

実習担当助手として三年間勤務いたしました。当時の先生方と一緒に実習依頼状や実習日誌を手作業で組み上げたり、実習日誌そのものを先生方と作成したりした思い出が懐かしいです。これからも生活文化学科の発展に非常勤教員として貢献できるように微力ながら尽力して参ります。

佐藤 寛之

初等教科教育法（理科）

生活文化学科の開設から三十周年をお迎えになるとのこと、心よりお祝い申し上げます。昨年度から授業を担当しておりますが、受講生の皆さんが楽しそうに観察や実験を行う姿がとても印象的です。教員養成のお役に立てるように、学生のニーズを学んでいこうと思います。

塩川 宏郷

医学概論

生活文化学科三十周年おめでとうございます。学科ではマインナーな医療系科目を担当していて、衝撃的だったのは非常勤一年目「履修者ゼロ」だったことです。初日に勇んで教室に入ったところ誰もいないがらんとした教室の窓から桜の花が綺麗で、お花見をして帰りました。懐かしい思い出です。

末吉 雄二

生徒指導・進路指導論

毎回の授業テーマの課題に対し、アクティブラーニングを実施。毎回の授業における自己評価欄の印象的な内容は「班で意見を出し合う場面で、自分では思いつかない意見が出てとても勉強させられた。」と。各学生の意見の交わり合いにより、新たな学びを見出だす姿はいつも私の喜びでした。

高橋 誠一郎

社会的養護2

生活文化学科三十周年、心よりお祝い申し上げます。至誠学園の行事にもボランティア等で子どもたちを支えていただいております。学生の皆さんの熱意や、先生方の温かいご指導に感謝しております。今後さらに豊かな学びの場として発展されますことをお祈り申し上げます。

竹内 真純

「コミュニティ心理学」・社会心理学調査実習

「コミュニティ心理学」ではコミュニティにおける様々な課題についての講義、「社会心理学調査実習」では学生自身が仮説を考えて調査分析を行っています。学生の皆さんが何に興味を持っているのかを知るとともに、自分たちの関心を形にしていくな過程が面白く、私も勉強になっています。

西 かおり

保育活動の実践b

学生の方々と共に素材に触れ、表現を楽しむ時間は、子どもの感性に寄り添う大切さを改めて実感させてくれ、訪れるたびに新しい発見があり、いつも心がワクワクしています。三十周年という大きな節目を迎えられたことを心よりお祝い申し上げますとともに、今後ますますの発展をお祈りいたします。

松井 利恵

保育実習指導Ⅰ・子育て支援

保育実習指導に携わり十五年という長い月日が経ちました。多くの学生を保育所・施設実習に送り出しました。不安な表情の学生が実習終了後は少し自信に満ちた様子に努力と成長を感じるができます。これからも先生方・関係職員の皆様と共に、学生の成長を応援してまいります。

米山 真梨子

消費者安全論

消費者庁在勤中に講師を仰せつかり、退職して消費者団体で活動する今も、実務家の視点を活かして講義しています。学生一人一人が消費者問題を学ぶことで、より安全で豊かな消費生活を送る実践的な知識を身に付けることが目標です。生活文化学科での学びの「鍵」になることを願っています。

5 現職助手

西村 優希

幼児保育専攻

在学中も卒業後も、変わらずに温かく迎え入れてくださる生活文化学科の先生方の存在は、私にとって心の拠り所のひとつです。学科開設三十周年という素晴らしい年を、卒業生として、そして学科助手としても一緒に祝いすることができ大変光栄に思っております。

平木 陽子

生活心理専攻

三十周年おめでとうございます。学生が日野の落ち着いた環境で先生方に温かく見守られながら自己研鑽を続け、社会に羽ばたいていくその一助となれるよう助手として励んでいきたいと思っています。

平沢 咲恵

幼児保育専攻

生活文化学科三十周年おめでとうございます。卒業後助手として生活文化学科に戻ってきて、さらに学科の良さを実感しております。先生方の学生に寄り添ってくださる温かい雰囲気大好きです。任期満了まで学生や学科のために尽力してまいります。

本市 冴夏

生活心理専攻

自分が卒業した学科の三十周年を、学科助手として関われたことをとても嬉しく思っております。学生時代だけでなく、卒業生としても温かく迎え入れてくださる先生方のご健勝、また、生活文化学科のますますのご発展を祈っております。



2011 年度：さくらカフェ掲示



2011 年度：フレッシュマンキャンプ



2011 年度：常磐祭



2013 年度：学生作品掲示



2013 年度：旧保育演習室



2013 年度：旧保育演習室



2014 年度：箱庭人形



2015 年度：生活心理専攻授業風景



2015 年度：常磐祭



2016 年度：幼小実習報告会



2020 年度：グラウンドベンチ



2021 年度：幼児保育専攻授業風景「お琴」



2021 年度：生活心理演習



2022 年度：学科卒業式謝恩会



2024 年度：生活心理専攻授業風景「キャリア心理学」



グラウンド冬



銀杏並木 (1)



銀杏並木 (2)



グラウンドベンチ



日野キャンパス空撮



実践桜



創立 100 周年記念式典 (120 周年写真集より)



幼児保育専攻
助手 西村優希



幼児保育専攻
助手 平沢咲恵



生活心理専攻
助手 本市冴夏



生活心理専攻
助手 平木陽子



幼児保育専攻
准教授 野尻美枝



幼児保育専攻
助教 小坂光



生活心理専攻
講師 笠原良太



生活心理専攻
准教授 八木孝憲



幼児保育専攻
教授 渡辺敏



幼児保育専攻
教授 島崎あかね



幼児保育専攻
准教授 大澤朋子



生活心理専攻
准教授 作田由衣子



生活心理専攻
准教授 塚原拓馬



幼児保育専攻
教授 田中正浩



幼児保育専攻主任
講師 井上陽童



生活文化学科主任
教授 井口眞美



生活心理専攻主任
准教授 水野いずみ



生活心理専攻
教授 高橋桂子

沿革

一八九九（明治三二） 実践女学校創設

一九〇八（明治四一） 渋谷町に実践女学校付属幼稚園開設

一九四四（昭和一九） 戦禍のため実践幼稚園休園（戦時託児所となり、戦後は自然廃園となる）

一九四四（昭和一九） 実践女子専門学校家政科に育児科を設置（実践女子大学設立まで続く）

一九四九（昭和二四） 実践女子大学設立

一九九五（平成七） 家政学部的生活科学部への改称と同時に、生活文化学科開設

一九九九（平成一一） 実践女子学園創立一〇〇周年

二〇〇五（平成一七） 生活文化学科を生活文化学コース（定員四〇名）と、保育士コース（定員四五名）の二コース制となる
 〈保育士資格が取得できるようになる〉

二〇〇七（平成一九） 生活文化専攻（定員四〇名）と幼児保育専攻（定員四五名）の二専攻を設置

〈生活文化専攻では引き続き中学校・高等学校教諭一種免許状が、幼児保育専攻では幼稚園教諭一種免許状も取得可能になる〉

二〇一一（平成二三） 幼児保育専攻が幼稚園・保育士コース（幼保コース）と小学校・幼稚園教諭（幼小コース）の二コース制となる
 〈小学校教諭一種免許状取得が可能になる〉

二〇一四（平成二六） 現代生活学科の開設に伴い、生活文化専攻を生活心理専攻へと改称

〈認定心理士（心理調査）資格と公認心理師受験資格の取得が可能になる〉



生活心理専攻3年：水野寧々



生活心理専攻3年：伊藤咲希



生活心理専攻2年：古橋菜々

実践女子大学 生活文化フォーラム 30周年記念号(第29・30号)

2025年11月9日発行

編集者 生活科学部生活文化学科

発行者 (ホームページ <https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/>)

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

TEL 042-585-8918

FAX 042-585-8919

実践女子大学ホームページ <http://www.jissen.ac.jp>

「編集企画」協力・印刷所

日野テクニカルサービス株式会社

〒192-0916 東京都八王子市みなみ野5-28-5

TEL 042-637-6721

FAX 042-637-6270



実践女子大学 生活科学部生活文化学科
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8918 FAX 042-585-8919
<https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/>